分野別研究組織中間報告（2009 年度）

L2ライティングにおける日本語非母語話者のビリーフ

On the beliefs of non-native speaker of Japanese in L2 writing

長谷川　哲子（HASEGAWA Noriko）

本研究は、日本語非母語話者の日本語ライティング（作文執筆、作文評価）に対するビリーフについて考察し、より効果的な作文指導および自律的な作文活動に資する知見を得ることを最終的な目標とするものである。

平成 21 年度の主な研究成果として、以下の研究発表の要旨を挙げる。

・長谷川哲子(2010)「接続詞の使用と作文のわかりやすさについてー接続のスコープの観点からー」第 12 回専門日本語教育学会研究討論会口頭発表

［『第 12 回専門日本語教育学会研究討論会誌』5-6.　参照］

本発表においては、ライティング教材での指導項目とされる特定の表現形式（ここでは接続表現）の使用傾向の調査を通じて、一文レベルの意味関係（連接類型）に関する知識を見るのではなく、前後の文脈におけるスコープ（どこまでを接続の範囲としているか）、および、それが実際の文章でどのように機能しているかを考察した。その際には、「プロフィシェンシー(proficiency)」の観点を導入した。ここでいうプロフィシェンシーとは、簡単にいうと、ある言語（ここでは日本語）について何を知っているかという知識面の豊富さではなく、何ができるかという運用面の能力を指している。日本語非母語話者の作文やその接続詞使用を対象とした先行研究のほとんどは、接続詞の使用に関する数的および量的側面に言及するものであるが、今回の調査では、ライティングにおけるプロフィシェンシーを測る一つの指標として、作文プロダクトにおいて、接続詞を用いながらどれだけ長い範囲をコントロールできるかという質的な観点からの考察を行った。その結果、従来の研究で着目されることが多かった研究作文における接続詞使用の数的傾向について、その作文に対する評価との間には、関連を見出しにくいことが明らかになった。結論として、接続表現の指導においては、既存教材のように一文レベルの意味関係を提示するだけでは不十分であり、一文を超えた範囲の論理関係をコントロールすることが必要であること示した。また、接続箇所の部分的・全体的な位置づけを意識させることの重要性に言及した。

こうした研究をふまえ、今後はさらに第二言語ライティング全体を視野に入れ、関連文献を渉猟していく必要がある。今後の研究におけるリサーチクエスチョンとして、次の 3 点を主な研究課題としたい。

1)ライティングに関して、日本語学習者はどのようなビリーフを持っているか？

2)ビリーフと作文プロダクトはどのような関連を持つか？

3)日本語学習者が行う作文評価（ピア評価）の特徴は何か？その特徴や傾向と作文ビリーフとの関連は見られるか。